

I shall not return. Good luck to you all !

久留米高専校長としての最後の講話は、できれば諸君と直接対面して行いたかったが、新型コロナウイルス感染症の猛威には抗しがたく、感染防止に係る社会的責任と学生・教職員の皆さんの安全を考え、残念ながら書面にてメッセージをお届けすることになった。ご寛恕願いたい。

まず、今回の新型コロナウイルスに関しては、これまでの感染症や難病の克服の歴史と同様に、ウィルスの生化学上の特徴が解明され、それに基づくワクチンの開発を含む医療技術の前進がこの世界的な危難を打開していくものと信じたい。そこでもやはり鍵を握るのは、科学 (science) とともに技術 (technology and engineering) だと思う。技術科学を学ぶ諸君の中から、将来何らかの形で、この人類史的な偉業に貢献する人が現れることを願うものである。

久留米高専は、小職にとっては、素晴らしい学校であった。何よりも教育理念が立派である。

「自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」

諸君は、この教育理念に基づいてエンジニアとしての資質を磨き、人格を陶冶している。このことを自信とし、大いに誇ってよいと思う。

理念の謳う技術者育成は、正課（授業）だけでなく課外活動においても行われてきた。新制高専初代校長の和栗明先生は、次のように記されている。

「…高専では文武両道である。選手諸君は互いに励まし合って母校の名誉のために戦うのである。私は5年間修練に修練を積み重ねた努力に対し、優勝の栄冠が授けられることを彼等のために切に祈っているものであるが、たとえ授けられなくても彼等の努力は部の後輩者に伝わり、伝統となって残り、何時の日か優勝の栄冠に輝くであろう。

かような訳で、熱心に部活動をした学生は、勉強と練習で大変であろうが、何物にも代え難いものを得、高専で学んだことは本当によかったと感謝しているのである。生涯の友も得られるのではないか。」
（「教育革新の基本問題と工業高専」）

全校集会で学生諸君の文武両面での活躍を顕彰する時、小職はその度に感動で胸一杯になったが、和栗先生のこの一文を拝読し、その所以^{ゆえん}が分かったような気がした。そして、改めて久留米高専の伝統の優秀さと強靱さを知った。この良き伝統の中で育まれた諸君が、今後、日本で、そして世界でエンジニアとして活躍されて行かれることを心より祈念するものである。そのためにも、諸君、日々精進あれ！

小職の歴史研究の対象でもある Douglas MacArthur の次の言葉を引いて、令和元年（平成31年）度終業式の校長講話を結びたい。“Old soldiers never die ; They just fade away.”

追伸 以下は昨年6月、久留米高専同窓会久留米工業会誌『小森野だより』28号に寄稿した拙文である。お許しを得て再掲する次第である。

校長在任中にいつの間にか筑後川に魅了されることになった。天が試練として与えた禍福のうちの「禍」の側面（豪雨災害）については触れることができていないが、ご高覧くださいれば幸いである。

遥かなる筑後川

久留米工業高等専門学校長 三川 譲二

高専校長を拝命することが決まり、赴任先がようやく久留米と知らされたのは、平成二七年の三月初めになってのことであった。あれから早くも四年余を経た。久留米高専校長として感じているところの今を少しだけ書かせていただく。

久留米高専のことについて十分な知識を持たずに赴任した小生にとっての僥倖^{ぎょうこう}の一つは、同窓会の皆さんとの出会いであった。同窓会評議員会や各支部総会等でご面識を得た皆さんは、さすがに実社会の第一線で活躍されているだけあって、聡明で、見識があり、進取の気性に富んでおられる方ばかりだった。当然のことながら、学校運営にも、内外ともに、難しい判断が求められることがある。そうした中、同窓会の皆さんからは、折に触れて貴重なご助言や励ましをいただいている。心強い限りである。

同窓会の皆さんが立派であるとしたら、現役学生の諸君もまた同様である。学生会や寮生会、クラブ等課外活動のリーダーたちと相まみえているとその優秀さがひしひしと伝わって来る。もちろん、授業においてもまた然り。頼もしい限りである。

卒業生から現役学生へと久留米高専の良き伝統が連綿と育まれていく様は、学校のすぐ南を滔々と流れる大河筑後川のような常々考えている。だから、入学式と卒業式・修了式の告辞の冒頭には、時候の挨拶として筑後川（千歳川）やそれが織りなす自然について努めて触れるようにしている。

筑後川水系が生み出す素晴らしい自然は、夏目漱石も俳句に詠んでいる。久留米出身の学友菅虎雄の関係で、漱石は熊本の第五高等学校（旧制）在職時代に何度か久留米を訪れ、句碑もいくつか残されている（原武哲『夏目漱石と菅虎雄』教育出版センター、一九八三年）。中でも、「菜の花の遥かに黄なり筑後川」は、小生が最も好きな句である。原武先生によれば、これらの句は『草枕』の場面描写にも活かされているとのことである。

周知のとおり、筑後川は「筑紫次郎」という異名を取っている。久留米よりやや下流域にある現在の佐賀県神崎市が輩出した教育者・作家である下村湖人の名作『次郎物語』の「次郎」も筑後川に因んだものだと思っていたが、湖人のご息女明石晴代さんの『「次郎物語」と父下村湖人』（勁草書房、一九八七年）によればそうではないらしい。しかし、『次郎物語』には、大川（筑後川）での父との水泳の様子や筑後川上流探検（無計画の計画）等の記述もあり、筑後川が「精神の発展小説、教養小説」（福田清人）としての『次郎物語』の自然・人生認識の核の一つになっているのではないかと小生は考えている。

余談だが、「令和」初めの休日に京都府の舞鶴に帰省した。近くのスーパーマーケットで、単身赴任中の小生が常食としている久留米近郊産の小松菜を見つけた。筑後川が醸す肥沃な土壌の産物がここにまで届いているのかと感慨ひとしおであった。翻って、久留米高専の学生諸君が、エンジニアリングやテクノロジーの世界で筑後川のような豊かな実りを生み出していかれるよう祈るばかりである。